

保育、遊び、散歩

加用 文男

ええ？ ほんと？

『エルマーになった子どもたち』（岩附啓子＋河崎道夫 ひとなる書房）という本は、保育における遊びの実践記録書としてひそかなるベストセラーといわれています。

「エルマーのぼうけん」（ガネット作）を読み聞かされた子ども（五歳児）たちが、その最後の部分を読み終わった後で、保育者から「（そういえば）む

かし、おじいさんが片田の山へ出かけていったとき、ほら穴のなかでりゅうのしっぽをチラッと見たことあるって聞いたことあるよ」、という言葉を聞いたことがきっかけでした。

そこで、「へえー、あす遠足に行く片田の貯水池にりゅうがいるの？」「ぼくたちはほんとうに探検に行くの？」「そんなら、エルマーといっしょやな、ぼくたちも探検にいくんや」「スゴイ！」、とい

うふうに進展していきます。

こだわる人たちがいますので念のため付け加えておきますが、ここで最初のきっかけをつくったのが誰であったかは主たる問題ではありません。子どもの発言だったという場合ももちろんあります。

同じく河崎氏が共著者になっている『ぼくらはへなそうる探検隊』（ひとなる書房）は東北地方のある保育園が舞台になっていますが、ある日、園の近くの林に散歩に出かけたあとで康君という男の子が「先生、ぼくね、へなそうる見たつたよ」と言い出したことがきっかけでした。

「ぼく、こうやって大っきい目で見たんだから」。目をパッチリさせながら一生懸命話しているその表情の真剣さを受け継ぐと、保育者が取り上げて他の子どもたちに伝えたことから始まっています。子ども「ほんとうにへなそうるだった？ 赤と黄色のしましま模様だった？」。康「そうだったよ」。子ども「どのくらいの大きさ？」。園庭に出た博行君

「先生、ウヘン、ウヘンで声するよ」。以下議論が続きます……。

こう言う時の子どもたちの発言は、いわゆるふりを楽しむごっこではありません。保育者やクラスの子達の現実の発言に対して、「えー？ ほんと？」「スゴイゾ！」と興奮した反応を示しているのです。さて話を戻して、「エルマーのりゅう探検」をかねた遠足当日には、山の中をあちこち捜しまわったあげく、やっぱりりゅうはいないんじゃないか？と思われた頃、再び保育者が、突然「あっ、りゅうのしっぽが見えた！」と叫ぶのです。

これをきっかけに右往左往の大騒ぎが始まり、「どこに」「どこに」、といっせいにうしろをふり向く子どもたち。「なんにも見えへん」「どっちのほうに逃げていったんやろ？」「女の子がぎゃあぎゃあ騒ぐもんで、りゅうがびっくりしてにげてしもたんや」と怒りだす子。

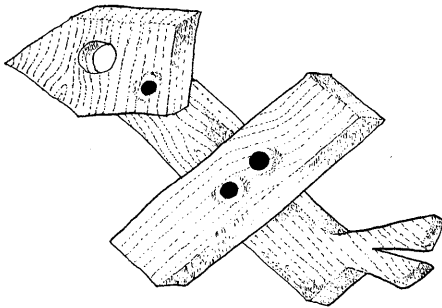
はじめのうちは見ることができなくて残念がって

いた子どもたちの中にも、しだいに「ガサガサいう音が聞こえた」「ぼくはチラッと見れば見えたような気がする」、と会話に微妙な変化が生まれ、帰りのバスでは「りゅうが見られてよかったなあ」、となっていくのです。

普通の取り組みでは話の大筋はこのあたりでおしまいになるのですが、実践者の岩附さんはそういう人ではありませんでした。その後、子どもたちはこのりゅう探検の経験を生かして劇遊びを楽しむ機会を得、また世界地図や地球儀をだしてきて本にあった「動物島」や「みかん島」などを捜し当てて行きます。公園で「エルマーの家づくり」もします。みんなで絵を描き、話もつくり、絵本を作ります。大展開していくのです。もちろんその過程では議論もえんえんと続いており、「一億年も前に滅んだはずの恐竜が何故生きていたのか?」「エルマーたちが誰にもいわずにないしょにしていたはずの話をどうして作者のガネットさんが知ったのか?」、などな

ど驚くべき議論を展開しています。

何故生き残っていたのか? については、議論の末、「みんなに好き嫌いがあるように、りゅうにもあって、スカンクキャベツが好きだったりりゅうだけ



が生き残れたんだ」というダーウィンばりの結論へ。「じゃあ、そのスカンクキャベツって何だ?」、ということになります。さっそく、園にある野菜図鑑を出してきて調べるのですが、当然ながら出ていないのです。

「日本の図鑑にはのってないんじゃないか?」、とあきらめかけていたその夜。保育者はなかばあきらめつつも、もしやとも思いなから自宅にある植物図鑑とにらめっこ。夜もふけてきた頃になって、「ザゼン草」を発見します。これが北米あたりではスカンクキャベツと呼ばれているのです。

ああ、早く朝が来ないかなあ、驚く子どもたちの顔が浮かび眠れぬ夜をすごしたそうです。翌朝、「おはよう、みんな、スカンクキャベツ見つけたよ!」、とさくら組の部屋に飛び込んでいくと、「えーっ! ほんと? 早く見せて見せて、胸がドキドキして心臓が破裂しそうや」と子どもたち……

(以下省略) ……。

評価の背景

以上は概要ですので、興味のある方には是非原本をお勧めしますが、保育の関係者の間では評価は分かれるかもしれません。「実に面白い、子どもたちがイキイキして探検に出かけ、頭をひねり、議論し、などなどすばらしい、感動した」、という意味から、「でも、こういうのって遊びなのかしら? 保育者の仕掛けだし、本気になっちゃってるし……ごっこじゃないみたい」、という消極的な意見まで多様なようです。

こういうのは遊びに対する感覚の問題ですので、日本中の保育者が全員一致で賛成とか反対とかいう問題ではもちろんないでしょう。遊びや保育に対する感覚の多様性はあってしかるべきものです。ただ私は、ある時のあることをきっかけにして、感覚の違いが実は背後にある保育の条件によって生み出されている場合があるらしいことを知りました。それを書いてみたいと思います。例えていえば、西洋人

の肉食志向、日本人の魚志向などが、単に好き嫌いの問題というよりも、大陸の遊牧民と島国の農耕民の違いから生まれてきたものである、といったことと似ているかもしれません。

ある研修会で

さて、話を戻しまして、私は数年前にある地方の幼稚園の先生たちの研修会に出かけました。子どもの遊びについての講演依頼でした。その時、話の一部として「エルマーになった子どもたち」のような実践を紹介したのです。その後の意見交換の中で、五歳児担当のある先生から次のような素朴な質問が出されました

「私たちも冒険物語が好きで、エルマーのぼうけんもピーターパンも読み聞かせて、それを素材にごっこか劇遊びをやります。子どもたちも大好きなんです。でも、私たちの場合、たとえばピーターパンだったら、ピーターパンになったり海賊になったり

して、ごっこでたたかい場面を楽しんだり、宝さがしごっこを楽しみます。そこで、わざわざ本物らしく見せた地図を出したり、あそこに本物の宝が隠されているなんて言って、ほんとの探検に持っていくような実践はしません。そういうのは子どもの世界に大人が無理に持ち込んでいるように思いますか？」

穏やかな口調ですが、率直な疑問の意見表明でした。

私の意見は、同じくピーターパン物語を素材にしても、それは素材なので、ごっこの素材にもできるし、探検・ほんとう？遊びの素材にもできる。五歳児ならどちらでも可能でしょう。どちらになるかは、その時の子どもたちの状態とか保育者のねらいや好みによって違ってくるのではないか、どちらがいいかは一般論で決められるものではないと思いますか……と答えました。

この答え方はいたって穏当なものでしたので、表

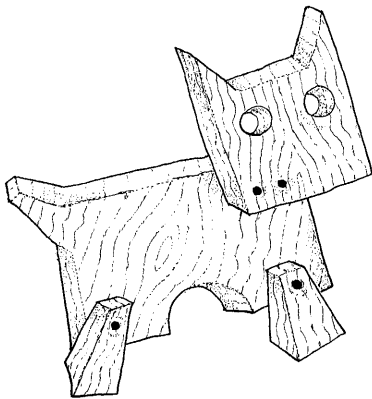
面的には納得していただけたように思えたのですが、どうも先生たちの胸にストンと落ちてはいないようにも感じられました。その後、幼稚園でのピーターパンごっこの実際のところの実例をお聞きしているうちに、ふと私は尋ねました。

「あいう、室内での実践のお話が多いみたいですが、散歩にはどういふところに出かけられますか？」。

先生「それが問題なんですよ、私たちの地域の幼稚園というのは、教育委員会から散歩を許されていませんので、私たちもできないんです……」。

私の中で、ある氷解現象が起きました。「先ほどの話とそのことが関係していないでしょうか？ 園内だけでの保育では、室内はもちろん園庭でも、あそこには何か隠されているのではないか、ひょっとしてあそこには何かがあるぞ、というような発想は出てきにくいでしょうか？」

二、三歳児ならまれにあり得ます（押入など）



が、四歳児や五歳児ではちょっと考えにくいですねえ。これがたとえ散歩先の林とか山とか大きい公園だったらどうですか？ そういふところで、ピーターパンごっこをする。そうしますと、子どもの中

には、ふらふら歩いているうちに、どこかで紙切れみたいなものを拾ってきて『先生、これ何だろう？ ひよっとして海賊フックの宝物の隠し場所の地図じゃない？』、なんて言い出す子が出てきても不思議ないでしょう？

こういう時、子どもたちの集団に遊びの方向をめぐって分岐が生じているわけですから、保育者は二つの選択肢の前にたたされることになるわけですよ。それを取り上げて『うわー、ほんとかもね』と、みんなして探検に走る方へと向かうか、それとも、一応その子の考えは聞き置いて、やはり遊びとしてはそれまでのごっこ方向で継続して楽しむ方を選ぶか、そういう分岐です。保育者がそのどちらの方を選びなくなるか、それはその人の好みもあるし、その時の子どもたちの集団の状態もあるでしょう。何か、そういう問題のように思いますが……。

議論は、時間切れもあってそこでおしまいになっ

たのですが、印象深い経験でした。

保育観と保育の条件

保育内容は、単に考え方の違いというだけでなく、実は保育をめぐる条件によって深いところで規定されています。地域・立地条件、保育者の労働条件・集団構成、親たちの層、園の歴史、園長や自治体・教育委員会などの姿勢、保育内容をめぐる保育者の自主性の保証程度……。

乳幼児保育の場では、散歩が自由にできる条件があるかないか、これは決定的な違いをもたらします。そうでないと「園は子どもの宇宙である」などといったせせこましい発想をもたらしてしまうわけですよ。

十数年前ならいざ知らず、現代では家庭でも室内で過ごすことが多くなっていますし、それでなくとも子どもたちの経験の範囲は非常に狭い場所に限定されがちです。保育所や幼稚園でこそ、子どもたち

の実情に即して、経験の幅を広げられるように散歩などに意識的に取り組んでいく必要があるのではないでしょうか。地域の多くの大人たちとのふれあいも生まれてきますし、自然とのふれあいも追求すればまだまだ可能です。

そういうことに加えて、保育者自身の保育観への影響という問題もあるのです。散歩のような取り組みをいつもやっているか、ぜんぜんやっていないか、これによって保育の形態そのものが違ってきますので、日常目にする子どもたちの姿も当然違ってきます。これが保育者の子ども観にも少なからぬ影響を与えてしまわないはずはないのです。

先に紹介した「エルマー」「へなそうる探検」だけでなく「ガリバーと21人の子どもたち」「おおどろぼうホッツェン・プロッツと共に」（以上は京都）「ブロンンのぼうけん」（北海道）などなど類似した実践はたくさん報告されてきていますが、いずれもある共通点を持っているのです。園全体として

日常的に散歩などの取り組みを重視して、保育の中にしつかりと位置づけ、遊びの展開の基礎のひとつと考えているのです。そういう園、保育者たちによる取り組みなのです。山や川や林や森は謎と不思議に満ちている、そういう背景を利用してこそ成立し得たといえそうです。

是非、これを機会に自分たちの保育観が自分たちの置かれている保育の条件によって深く規定されているのではないかと、そのことを考え直す機会にしたいだけだと思います。

（京都教育大学）